



狂言 = Human Comedy

野村 萬斎 Nomura Mansai

かつて、イギリスに留学した際、外国人に狂言を教えたり、説明したりする機会がありました。そこで、狂言の所作である「型」を教えたのですが、まず、「型」をどう英語に訳すかということから問題になってくるわけです。とりわけ、芸道や武道のようなものには、日本文化に根ざした共通概念があるようで、「型」にも、英語の form を超えたところにある「気」のような意味合いが含まれています。例えば、狂言の基本に、「腰を入れる」という姿勢があります。あごを引き、胸を張り、腰を引き、膝を少し曲げる、すなわち、体をくの字の連続に屈曲させていく中で、腰の骨盤を下に向けて、膝をかがめる姿勢です。それを教えるときに、日本人には、「ここで、こうやって『腰を入れて』と、慣用的な言い回しを使うことができるのですが、英語にはそのような言い回しはないし、直訳してもおかしくなる。そこでまず、「腰を入れる」ためには、「体に芯を持つことが重要になってくる」などと、イギリス人とディスカッションし、必要に応じて、concentrate on your center とか feel your gravity on your waist と、その背景にある意識などを補足することで、自然と膝を屈曲させ、腰を入れる姿勢を表現したわけです。すなわち、「腰を入れる」という日本語を英語に訳すのではなく、まず、その姿勢の本質を考え、それを英語で表現したのです。このように、日本人なら何となくわかるけれど外国人にはない感覚を教えることが、逆に、「型」とは何なのかについて、問い直すことにつながっていったのです。

こうした繰り返しは、ひいては狂言とは何かについて考えることになりました。そして、私は狂言の本質についてシンプルにしかもの確にイギリス人に説明する際、「人間讃歌の劇」という意味で、

human comedy ということばを使うようになりました。狂言には、「このあたりのものでござる」という出だしの象徴的なセリフにあるように、「自分は特別な存在ではなく、(お客様も含めて)私たちは、時代も場所もここで共有していますよ」という精神が宿っています。その上で、太郎冠者などの登場人物が、誰もが持つ欲望の代弁者となってくれます。人間は本来、欲望を理性によってコントロールしているのですが、太郎冠者は、欲望に従順で主人公がダメだと言ったお酒を、飲みたいと思ったら飲んでしまいます。しかもそれが、ほとんど最終的に失敗に終わり、怒られたりするので、見る方はカタルシスを感じるのでしょうか。狂言を「滑稽な演劇」というと、演じることが滑稽であるように思いがちです。しかしながら、狂言とは、実は「人間とは滑稽な存在であることを見せる演劇」なのです。自分の欲求、欲望に素直に一所懸命生きている人間ほど滑稽に見えるということを一所懸命に演じて、滑稽に見えるようにしているのです。それを否定的にではなく、肯定的に捉えたのが、human comedy ということばでした。

狂言を当たり前のことのように子どものころからやってきて、さまざまな人たちと関わるうちに、その本質や普遍性について気付いてきたと言えるでしょう。

のむら まんさい

1966年生。狂言師。東京芸術大学音楽学部卒業。「狂言ござる乃座」主宰。国内外の狂言・能公演はもとより、現代劇や映画の主演、古典の技法を駆使した作品の演出等幅広く活躍。94年に文化庁芸術家在外研修制度により渡英。世田谷パブリックシアター芸術監督。